

【体育科】教科提案

運動の楽しさを真剣に学ぶには ～ 学びあえる学習集団を考える ～

1 研究テーマ設定の理由

(1) はじめに

体育は、運動そのものを学ぶ教科である。運動を学ぶということは、運動の楽しさにふれることだと考えている。

学習指導要領では、『心と体を一体としてとらえ、適切な運動の経験と健康・安全についての理解を通して、運動に親しむ資質や能力を育てるとともに、健康の保持増進と体力の向上を図り、楽しく明るい生活を営む態度を育てる』を目標としている。その中で、究極的な目的は、『楽しく明るい生活を営む態度を育てる』ことであると考えてきた。つまり、運動をして楽しかった、もっと運動をしたいという意欲や態度の育成が学びだというのである。ところが、次の指導要領の改定では、『楽しく明るい生活を営む態度を育てる』ことではなくなるだろう。体力低下や基礎・基本の定着が、体育でも問題視されようとしているためである。体育科の中で、「楽しい体育」という言葉をよく耳にする。現在、小学校で行われている体育科の主流であるといっても過言ではない。しかし、「楽しい体育」が言葉として誤解を招くことがよくある。それは、「楽しい」の中身を吟味せず字義の通りとらえたり、楽しければ全てよしと考えたりしたからである。我々が考える「楽しい体育」は、民主的な関係の中から、もっと上手になろう、なんとかして勝ちたいなどの願いを実現していく過程を学習していくことだと考えている。子どもたちは、運動をする目的があり、目的追求が楽しさになっていく。

(2) 学校提案とかかわって

本校の研究テーマは「互いのまなざしが響き合う学習」である。これは、簡単に言えば、学習の質の高まりをめざしている。学校提案を受けて、体育科のテーマは「運動の楽しさを真剣に学ぶには」とすることにした。楽しさと真剣味は相反する関係にあるように思われるかもしれない。しかし、子どもたちが運動を楽しもうとすればするほど、真剣に活動してくるものである。大人が運動を行う魅力はいろいろある。友達に会えるから。自然を満喫できるから。健康のため。体力の維持増進。その人なりの理由が考えられるだろう。しかし、教科体育の場合は、運動の付随的な要因を目的化することより、運動そのものを学習するという意味が大きい。つまり、運動固有の楽しさにふれようとする、めあて意識がはっきりしてきて、願いを明確にもつからである。また、それを達成していくとあらたな高まりとなり、スパイラル的に意欲や技能、知識理解も向上していくのである。それが真剣な学びだと言える。例えば、跳び箱の楽しさの一つは高さの追求である。高さ追求に向かうほど、学習への真剣味が増してくる。また、ボール運動でも、勝ち

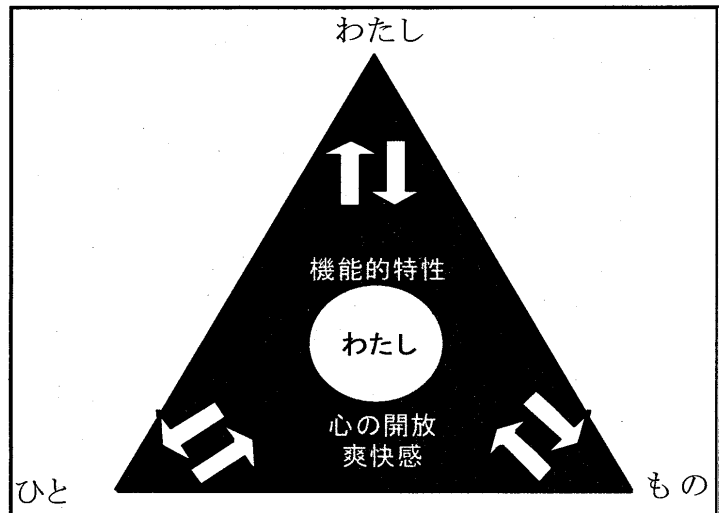
たいと願うほど真剣味が増してくるのである。

体育科は、わたしと運動との関係構築が主眼である。関係構築とは、運動の楽しさにふれることであり、運動の中に自分の感じる価値を見いだすことである。そこには「わたし」、「ひと」、「もの」との関係がある。(平成14年度本校紀要参照)

(3) 体育科でめざす子どもの姿

子どもたちは運動と出会ったとき、その子なりのおもいを持つ。「かっこいい」「おもしろそうだ」といったプラスのおもいや、「いやだ」「にがてだ」というマイナスのおもいである。われわれは、まず、最初のその子のおもいを大切にしていきたいと考えている。

活動が進むと、おもいが更新されてくる。本校では、「できた」「活躍した」



「貢献した」など、次への意欲となる成就感や満足感を味わわせたいと願っている。それは、教師だけの願いではない。現状への肯定と満足から、新たなめあてに挑戦していく子になって欲しいのである。高学年のボール運動を例にとり具体的に説明してみよう。高学年になると、チーム内やチーム間のトラブルが目立たなくなっていく。それは、マナーの良さだと言えなくはないが、本当にそうなのだろうかという疑問が残ることがよくある。自分のおもいを出しきれていないのではないだろうか。我々がもとめている姿は、個人、チーム内、チーム間で競争と向き合い、競争を学習することである。もっと、生の自分を出し合い、その子たちの集合体の中で学習していくことを願っているのである。

2 体育科における「互いのまなざしが響きあう学習」

(1) サブテーマ「学びあえる集団の関係を考える」とは

今年度、教科の研究テーマ「運動の楽しさを真剣に学ぶには」を受けて、「学びあえる集団の関係を考える」を設けた。設定理由は次の通りである。

子どもは学ぶことが好きである。そして、自分の力を高めたいと願っている。だから、より良い学習対象や仲間、適切な支援に接することで、その子の学びが真剣なものとなってくる。その子の学びが真剣になると、もっと深く・ひろく学びたいと願う。それが、真剣味のある学びだと考えている。真剣な学習をさせるためには、運動の特性の吟味が第一の支援である。今まで、特性の吟味というと運動の一般的特性や機能的特性を考えていた。今年は、それに加え、意

欲的に取り組むためだったり、技能が向上するためだったりするために、運動の構造的特性を明らかにしていくことにした。

個人の学びだけでなく、学びあえる集団が大切なのは言うまでもない。学びあえる集団とは、まず、その子が集団の中での居場所を認知し、自分を出せることから始まる。そして、それを認めあることが重要なことである。体育の中では、自分の願いをわかってくれる仲間がいて、同じように喜んだり、悔しがったりできる関係である。また、グループでいることによって、切磋琢磨できたり、伸びあったりできることである。それが、学びあえる集団であり、これを築き上げるために我々教師がどんな支援をしていくかを研究の柱にしていきたいと考えている。

今年度の学校の研究主題は「互いのまなざしが響きあう学習」である。上述した、真剣な学びが展開され、学びあえる学習集団が構築できたとき、子どもたちは真剣味のあるかかわり方をしていこう。時には、厳しい意見対立となるかもしれないし、暖かみのある雰囲気となるかもしれない。しかし、それは、かかわり合いだけを問題にしているのではなく、真剣な学習をしてきた結果としてかかわり合いの質を問題にしている。かかわり合いの質が高まると、その子の学びの質も当然高まっていくだろう。それが、響きあいと考えている。

(2) 学びあう集団の大切さ

次に、具体的な実践の中で説明していくことにする。これは、昨年度の実践「とびばこあそび」(2年生)からである。(詳細は、本校紀要30集参照)

彼女(本単元の着目児♡)のめあては「開脚跳びのたての3段」であった。授業当初の様子は、おしりが跳び箱の中央にやっと来る程度であった。しかし、わたしが他の場に行って指導していると、女の子の数人がやってきて、「先生、♡ちゃんもうすぐ跳べそうやから見に来て。」と言いにきた。言ってみるとおしりが跳び箱の前の角に当たっている。「本当に跳べそうやね。がんばろう。」とはげましていると、本当に跳び越えられたのである。そのとき、同じ場で学習していた子たちから「やった。跳べた。」と歓声があがったのである。歓声をあげた子どもたちは、「もうすぐ跳べそうだ。」と言いに来てくれた子たちである。それが、彼女にまつわる『まなざしの共鳴』なのだと感じた。どうしてかというと、♡は運動技能が高くない。それは、本学級の児童なら誰も知っている。しかし、学習にすごく意欲的で、準備や後片づけも最もがんばれる子だということも知っている。だから、同じ場で活動し、歓声をあげた子どもたちは、彼女の跳びたいという気持ちに共鳴し、励ましあいがうまれ、歓声が上がったと思った。ただ単に、跳べそうにない子が、懸命に活動している姿に触発されただけではなく、準備や片づけもまじめにする学習の姿に響きあったのではないだろうか。それ以後、♡は休憩時間に苦手な鉄棒であそびだした。それは、他の子に共鳴したと考えてよい。より良い人間関係のおかげであそびの幅がひろがった。それは、♡の「意味と内容」がひろがったと言えるのである。

これは、その子のがんばりを認めたからであり、自分のことのように喜んだから、その子の学びの質が高まったと言える。また、このことを通し、一緒に喜んだ子どもたちも高まっていった。これが響きあいだと考えている。

3 研究の展望

質の高い学習を成立させようとしたとき、子どもたちの意識の高まりと技能の高まりの保証をしなくてはならない。

(1) 意欲の高まりを知る手だて

◇ 適切なグループ化

ボール運動領域のように、集団でおこなう運動の場合、チームの決め方が大切である。それだけでなく、個人で行う運動の場合も、固定的なグループを形成するということではないが、グループを有効的に活用していきたいと考えている。特に、技能の高い子や低い子は、自己のめあて追求だけでは意欲の高まりにつながりにくいことがよくある。しかし、友達とのかかわり方がより良くしていくことで学習意欲の向上につながると考えている。

◇ 学習の振り返り（自己評価）の充実化

毎時の授業の振り返り（自己評価）をしっかりとさせることで、その子が単元の中で、意欲の移り変わりをみとることができる。向上しているか停滞しているか、または、低下しているかによって、その子への手だてがかわってくる。

◇ 体育作文の活用

学習カードを使った自己評価と同じように、毎時の体育作文を書かせている。それによって、その子の内面にせまることができるだろう。また、授業の中に、それを生かすことによって、子どもに対応した流動的な学習過程になる可能性もある。

(2) 技能の高まりを保証する手だて

◇ 個人・単元の到達目標の設置

単元での技能向上のねらいを明確化していく。それによって、支援や場の設定があいまいになることはない。また、その子の到達目標を教師がもつことで、その子への願いにつながる。その子の実態をしっかりとふまえ、技能の到達目標をもつことで、その子への支援の根拠にしていこうと考えている。

◇ 学習資料の吟味

技能の高まりを保証しようとするとき、学習資料が重要になる。それをしっかりと吟味したい。

◇ 構造的特性の重要性

到達目標や学習資料は、その運動の構造的特性をしっかりとふまえないとより良いものにはならない。そこで、構造的特性を学習指導案の中に明確に表していきたくと考えている。それが曖昧になると、子どもへの支援そのものが曖昧になることも考えられる。